

川柳 さいたま



紅葉

平成27年

10月号 (No.671)

日川協加盟

巻頭言

川柳的世界といふこと

願法みつる

「秋めいて、空がまた桔梗色に澄んでいる宵の口、名にしおう辰巳といわれる深川の色街だから、・・・(中略) 緋縮緬の裾さばきもあざやかに、お座敷の行き帰りにいそがしい。」文庫本七行もの長文は、山手樹一郎原作の長編時代小説「又四郎行状記」の冒頭の出だしである。十七箇所読点(カンマ)ばかりの綿々たる描写は、他の小説ではお目に掛からない構成である。全く珍しい冒頭部ではないかと思う。しかしこの文章は、嫺やかで生々とした江戸情緒を、味わい深く堪能させてくれる。以下に続く長編では、ストーリーがテンポよく展開されて行くのだが、この部分だけは、ゆつたりと、延々と流れる大河を彷彿させる。意図的な作者の狙いなのだろう。人間味のある川柳の世界を想い描きたくなる。ひるがえって凡夫の身が、句会や大会などへの出句に至るココロの在り様はどうだろう。折角の大自然をも狭い視野で見ているのではないか等と思わざるを得ない。故に凡夫と言うべきなのだが。

この世に多い川柳上手な方々の、川柳の世界観を学びたいものである。しかしそれも、実のところ、血を吐く程の修練のたと知れば、ただ沈黙在るのみ。かくして浅薄な川柳かじりは、尻尾を巻かざるを得ない。

日日是好

願法みつる

人間の匂いに鼻がむず痒い
無理数が整数になる政治論
向こう傷舐め合っている勇み駒
人生へ過払い金という制度
アンケートト白紙で返す良識派
愚痴らない筈が書いてる日記帳
肩の荷をまた重くする深情け
爪切りへ駄々をこねてる薬指
大袈裟な生き方だった壺ひとつ